令和8年度

平和推進事業報告書



令和8年8月５日（水）～６日（木）

愛知県海部郡飛島村

平和推進の村宣言

世界の恒久平和は、人類共通の願いです。

しかし、今日の世界情勢にみられるように、膨大な核兵器の存在が、世界の平和と人類の生存に大きな不安をもたらしています。

こうした状況のもとで、我が国は世界唯一の被爆国として、核兵器の廃絶を、世界に訴え続けなければなりません。

飛島村は、ここに、平和と国際協調を理念とする平和行政を推進し、＜安全で明るく心豊かな住みよい村＞の実現を念願して、「平和推進の村」を宣言します。

平成８年６月２１日宣言

愛知県　飛島村

事業の経過

平成７年７月３１日	戦後５０周年事業として飛島中学校の生徒６名を広島市へ派遣
８月	故佐野村長が津島市と海部郡の中学校２２校に被爆した広島の瓦を寄贈
平成８年６月２１日	「平和推進の村」宣言
平成９年７月下旬	平和推進視察事業として以後、毎年実施 飛島中学校生徒８名・引率３名（教諭２名、事務局１名）の計 11 名を１泊２日で広島市へ派遣
平成１３年８月５日、６日	平和祈念式典（８月６日）にあわせて派遣日の変更
平成１８年	事業名を平和推進事業とし、派遣人数を生徒６名、引率２名の計８名に変更
平成１９年～	報告会を実施（海外派遣事業との合同報告会）
平成３０年～	飛島学園文化祭にて、平和推進事業単独の報告会を実施

令和8年度

広島派遣

飛島村平和推進事業

事業のねらい

近年、戦争を知らない世代が人口の大半を占めるようになり、平和に慣れ、感謝する気持ちはおろか、真に平和を願うという思いが薄らいできている。人々を不幸に陥れる戦争を再び繰り返さないためにも、今日の平和が多くの犠牲の上に成り立っていることを見つめ直す必要がある。

この事業を通し、平和への願いをいっそう強め、今生きていることに感謝するとともに、学んだことを後世へ語り継ぐことが重要であり、平和に貢献できる人づくりを目指す。

派遣者

飛島学園9年

伊藤　來剛	岡島　未来	小坂井　杏莉
佐藤　結	奈須　晴大	西尾　悠陽

行程表

8月5日（水）

中央公民館 7:40 8:00 → 近鉄蟹江駅 8:23 → 名古屋駅 8:44 8:58 → 広島駅 11:12 → かなわ ekie店 〈昼食〉 11:20 12:00 → EN HOTEL Hiroshima 〈荷物預入〉 12:20 12:40 → 平和記念公園・おりづるタワー 〈碑めぐり・体験講話・資料館見学〉 13:00 16:30 → 常太郎 〈夕食〉 18:00 19:20 → EN HOTEL Hiroshima 19:30

8月6日（木）

EN HOTEL Hiroshima 6:30 → 平和記念公園 〈平和記念式典・献花献水慰霊式〉 8:00～9:00 9:30～10:30 → 銀座ライオン ekie 広島店 〈昼食〉 11:50 12:15 → 広島駅 14:03 → 名古屋駅 16:19 16:26 → 近鉄蟹江駅 16:35 → 中央公民館 17:00

村長表敬訪問

7月15日（水） 飛島村役場にて

広島出発を前に、派遣生徒は加藤村長を訪れました。学園全体で作成した千羽鶴を披露し、生徒たちは派遣への抱負を述べました。

加藤村長から平和推進への取り組みや激励の言葉をいただき、派遣生徒一同は決意を新たにしていました。

原爆の恐ろしさや戦争の悲惨さ、平和の大切さなど、多くのことを学んできます。







碑めぐり

8月5日（水）　平和記念公園にて



語り部

広島被爆者援護会

二川　和子さん

原爆ドーム

もともとは、「産業奨励館」という建物で、広島の物産品の展示や販売を行うほか、美術展や博覧会など各種催し物の会場として親しまれていました。その後は内務省や広島県の木材株式会社等の事務所として使用されていました。

平成8年12月、核兵器の惨禍を伝える建築物としてユネスコの世界文化遺産に登録されました。



平和の鐘

広島の悲願に立ち、すべての核兵器と戦争のない、まことの平和共存の世界の達成をめざし、建設されたものです。

鐘の表面には「世界は一つ」を象徴する、国境のない世界地図が彫られ、撞座（つきざ）には、原水爆禁止をこめて原子力マークが入れられています。このマークをつくことで、核兵器廃絶の世界を誓います。



原爆供養塔

広島の悲願に立ち、すべての核兵器と戦争のない、まことの平和共存の世界の達成をめざし、建設されたものです。

鐘の表面には「世界は一つ」を象徴する、国境のない世界地図が彫られ、撞座（つきざ）には、原水爆禁止をこめて原子力マークが入れられています。このマークをつくことで、核兵器廃絶の世界を誓います。



原爆死没者慰霊碑

中央には原爆死没者名簿を納めた石棺があります。現在 132 冊ある名簿のうち1冊は「原爆被災者氏名不明者多数」とかかれた白紙の名簿で、多くの名前もわからない死没者の方のためのものです。

また、石棺の正面には、「安らかに眠ってください　過ちは繰返しませぬから」と刻まれています。

真ん中に見える平和の灯は、地球上から核兵器がなくなるまで、常に燃やされています。平和記念式典が行われる8月６日は灯が大きくなります。





体験講話

8月5日（水） おりづるタワーにて



語り部

広島被爆者援護会

土居　光子さん

土居さんが2歳の時に被爆し、母や祖父母から聞いた被爆体験をお話いただきました。

土居さんは、原爆投下の日、母と買い物に出かけた帰りの電車の中で被爆しました。突然の閃光と爆風で電車は止まり、多くの人が負傷しました。母は見知らぬ男性に助けられ、自分も助けてもらいました。

その後、安全な場所を目指して歩く途中、やけどを負った人々が「助けてください」「水をください」と苦しむ姿や、川や橋の周辺に多くの遺体がある光景を目の当たりにしました。しかし、母は幼い娘を守るため、助けたい気持ちがありながらも何もできず、「ごめんなさい」と謝りながら歩き続けるしかありませんでした。

祖父も家族を探し回り、地獄のような惨状を目にしました。家族は奇跡的に再会しましたが、自宅は壊れ、その後も祖母が失明し、原爆の後遺症で苦しみ亡くなりました。

母が「助けてもらった恩」と「助けられなかった人への罪悪感」を生涯抱えていたこと、そして、戦争は多くの命だけでなく、人々の心にも深い傷を残すものであると訴えました。

最後に「平和は特別なことではなく、身近な人に優しくすること、助け合うことから始まる」、「広島で起きた悲劇を二度と繰り返さないために、私たちに何ができるのか考えてほしい！」と強く語りました。

原爆学習

8月5日（水） 平和記念資料館にて



2016 年に現職アメリカ大統領として初めて広島平和記念式典に参列したバラク・オバマ氏が作成した2つの折り鶴が展示されています。

メッセージには「私たちは戦争の苦しみを経験しました。ともに、平和を広め核兵器のない世界を追及する勇気を持ちましょう。」と書かれています。







建物疎開作業現場では多くの犠牲者が出たそうです。

被爆した当時 12～14 歳の３名の中学生の制服を一体にして展示されていました。

とてもぼろぼろで原爆の威力やその場の壮絶さを感じました。

平和記念式典

8月6日（木） 平和記念公園にて

平和への誓い

もしも「大切なもの」が一瞬で消えてしまったら、どんな気持ちになるのでしょうか。
私たちが笑い合っているときにも、尊い命が失われている現状があります。
今もどこかで、当たり前の日常がうばわれています。
ぼろぼろになった制服。
黒く焦げたお弁当箱。
それは、当たり前の毎日を生きていた証です。
昭和 20 年(1945 年) 8 月 6 日、午前 8 時 15 分。
たった一発の原子爆弾が、人々の暮らしを、人生を地獄に変えました。
髪は焼けちぢれ、全身の火ぶくれが破れ、火傷した皮膚が垂れ下がった人々。
「痛いよ。苦しいよ。」
「助けて、お母さん。」
「死にたくない。」
「助けてあげられなくてごめん。」
死んでしまうつらさ、生き続ける苦しみは、想像することさえ恐ろしいことです。
私たちには、被爆体験を直接聴くことができる最後の世代として、
当時の記憶を事実として受け止める使命があります。
目をそらさず、知ろうとすること。
悲しい現実でも向き合うこと。
そこには、「生きたかった人々」、「生き続けた人々」の思いがあります。
私たちには、広島のこどもとして、行動する責任があります。
相手の気持ちを想像し、意見の違いがあっても認め、受け止めること。
平和への思いを、自分なりの方法で表現すること。
一人一人の小さな行動が、平和への後押しとなります。
平和とは、誰かからあたえられるものでなく、世界中の人々で創り上げるものです。
こどもである私たちも、その一員として平和への一歩を踏み出します。
かけがえのない「大切なもの」を、確かな希望を、未来へ届けるために。

令和 8 年(2026 年) 8 月 6 日

こども代表
広島市立高須小学校 6 年 柿崎 由宇
広島市立高南小学校 6 年 河野 和希

献花・献水慰霊式

8月6日（木）　平和記念公園にて

生徒代表　平和の誓い



本日、尊い命を失われた多くの方々に心から哀悼の意を表します。

私たちは、戦争を知らない世代ですが、昨日原爆ドームや資料館の展示を実際にこの目で見て、また、被爆者による体験講話を聞いて、戦争の恐ろしさ、平和の大切さを学びました。

そして、優しさを持ち、助け合う気持ちを大事にすることも学びました。

私たちは、被爆者の皆様が語り継いでくださった体験や願いをしっかりと受け止め、ここで学んだことを友人や家族、後輩へ伝えていくことを誓います。

令和8年8月6日　　飛島学園　佐藤　結







広島で学んだ平和の大切さ

伊藤　來剛

８月５日、６日に広島派遣に参加しました。この研修を通して、僕が一番印象に残ったのは、平和の語り部の方のお話です。その方は、原爆が落とされた日、広島の港の方へお母さんと電車で出かけていたそうです。帰る途中に空襲警報が鳴り、その後、広島に原子爆弾が落とされました。大きな爆風で電車が倒れ、お母さんとはぐれてしまいました。しかし、知らない人に助けてもらい、なんとか生きることができました。お母さんも必死に子どもを探し、しばらくして二人は再会することができました。帰る途中には、道や川にたくさんの人が亡くなっていました。「助けて」と言われても、みんな自分が生きることで精いっぱいで助けることができず、見て見ぬふりをして家まで歩いたそうです。おじいさんも娘と孫を必死に探しました。家族はみんな無事に再会することができましたが、次の日になると、おばあさんの目が急に見えなくなったそうです。原爆による被爆の後遺症だったと聞きました。また、外ではトラックが道に横たわっている人たちを構わずひいて進んでいたという話も聞きました。

僕は今までアニメや本、ＳＮＳなどで戦争について見たり、聞いたりしたことはありましたが、実際に原爆を経験した方から直接お話を聞くことで、戦争や原爆がどれほど恐ろしく、悲惨なものだったのかを、より強く感じました。普段、僕たちは学校へ行ったり、友達と遊んだり、ご飯を食べたりすることを当たり前のように過ごしています。しかし、広島でお話を聞いて、普通に生活できていることは決して当たり前ではないと思いました。今こうして家族や友達と一緒に生きていることに感謝したいです。

今回の研修で学んだことを、自分だけで終わらせてはいけないと思います。戦争を経験した人が少なくなっている今だからこそ、僕たちが聞いた話や感じたことを、家族や友達、次の世代の人たちに伝えていくことが大切だと思います。僕も毎日を大切にしながら、戦争の悲惨さと平和の大切さを後世に語り継いでいきたいです。

生き延びた　いのち

岡島　未来

僕の戦争のイメージは、「死にたくない」「日常に戻れない」「爆弾が落ちてくる」という怖さ、悲しみです。戦争の映画を見たこともないし、広島の資料館にも行ったことがなかったです。しかし、ひいおばあちゃんから戦争の話を聞いて僕たちの世代は戦争のことも知らないから、おばあちゃんから聞いた話や、広島で知った戦争のことを自分の言葉でみんなに伝えたいと思いました。僕のひいおばあちゃんは、戦争を生き抜いた人で戦争の話を教えてくれる唯一の人です。その話を聞いてこのテーマにしました。

実際に見たり聞いたりして感じたことは二つあります。

一つ目は実際に原爆にあった人の体験談です。その人の話は電車に乗っていて８時 15 分に原爆が投下されました。その電車は一瞬で窓や金属以外のものが無くなってしまいました。その話を聞いた瞬間に僕はとても驚きました。金属以外のものが一瞬でなくなるのが想像がつかなかったです。その人はとにかく家に帰るために必死に走りました。走っているときも倒れている人々がその人のスカートを掴んで助けてくださいと言われたそうです。この人は今も元気に生きていて戦争を知らない僕たちに戦争の恐ろしさを、残酷さを教えてくれました。

二つ目は原爆の想像以上の怖さです。原爆の資料館に行きました。そこには、原爆で被害にあった範囲の広さや、原爆の影響によって苦しんでいる人の写真、溶けた三輪車が展示してありました。もし飛島学園に原子爆弾が落ちたら飛島全域が熱線、爆風によって更地になります。自分たちの生活に置き換えるとゾッとしました。

大切な家族や友達が一瞬にして消えてしまったらあなたならどうしますか。

原爆によって亡くなった人がいる中で、九死に一生を得た人もいました。生き残った人は家族や友人を亡くし絶望の中、生きる希望も無くしながらも頑張って今日までいのちを繋いできてくれました。そして今、原爆の経験者は高齢になりました。僕が広島で学んだことは、ここには書ききれないほどあります。今度は僕が、原子爆弾の怖さや残酷さについて、戦争を知らない人たちに伝えていきたいです。

平和への願い

佐藤　結

私は「平和への願い」という自分のテーマを持って研修に参加しました。以前授業で学習したので、広島に原爆が落とされたことは知っていました。しかし、実際に広島を訪れ、原爆ドームや平和記念資料館を見学したことで、戦争や原爆の恐ろしさを、より感じることができました。

特に心に残ったのは、広島被爆者援護会の方々のお話です。原爆が落とされた時のお話をとてもわかりやすく語っていただきました。原爆が落とされた直後の広島では、地面にたくさんの人が転がっていたそうです。脳や内臓が飛び出た人、真っ赤に染まっていた人。本当に多くの人が亡くなったそうです。全く罪のない人たちが大勢、理不尽な爆撃によって未来を奪われました。そんなことが二度とこの世界で起こらないでほしい、という強い思いが、そのお話から伝わってきました。

また、原爆ドームを実際に見た時、戦争が過去の出来事として遠くにあるのではなく、今も私たちに平和の大切さを伝え続けているように感じました。広島では、原爆の悲惨さだけでなく、二度と同じことを繰り返してはならないという強い思いも感じることができました。

私は今回の平和学習を通して、平和とはどういうことなのかを考え直すことができました。私は、平和とは単に戦争がないということだけではないと思います。家族や友達と笑って過ごせること、自分の思ったことを自由に話せること、安心して日々過ごせること。当たり前のように感じる普通の毎日が、平和なのだと思います。

私達は戦争を実際に経験していません。だからこそ、広島で起きたことをしっかりと学ぶことが大切だと思います。また、実際に広島へ行って感じた平和の大切さを、次の世代に伝えていこうと思います。

これから私は、平和な毎日を当たり前だと思わず、過ごしていきたいです。そして、これからも多くの人が平和を願い続けることで、戦争のない未来を実現させたいです。

原爆の爪痕

西尾　悠陽

僕のテーマは「原爆の爪痕」です。なぜこのテーマにしたかというと、原爆によって今も尚残っている問題や影響について事前学習をしていた時に気になったからです。僕は戦争というものや原爆は人を狂わせてしまうと思います。そして、そんなものは地球にあってはならないと思います。そのため少しでもこの世界から争いが減るように身近な人から、「平和」を考えてもらいたいと思いました。そのために僕が広島で学んだこと、特に僕がテーマとした「原爆の爪痕」についていくつかに分けて伝えたいと思います。

一つ目は、今も尚、原爆により被爆した方が残っているということです。被爆には症状がいくつかあり、発熱や吐き気、下痢、頭髪が抜けるなどの被爆直後からあらわれる症状や、やけどが治った痕が盛り上がるケロイド、白血病やがんなどの年月を経てあらわれる症状があります。このような症状をまとめて「原爆症」といいます。そして被爆者の方で原爆症が再発するかもという状態に怯えて生活している人や、原爆症に苦しみながら生活している人がいると聞きました。これが最も大きい爪痕であると僕は思いました。

二つ目は、広島、長崎への原爆投下によって、冷戦中に多くの国が核兵器開発を行ってしまったということです。２０２５年現在、9か国が持っている核弾頭の数は、合計１２，２４１発で、そのうち3，９１２発がすぐ使用できるよう実戦配備されているそうです。一発であの威力なのに１２，２４１発がもし使用されたら地球が滅亡してしまうと僕は思います。

アメリカが広島、長崎に原爆を投下していなければ、今頃こんなにも多くの原爆は地球上に無かったかもしれないと僕は思いました。そしてこれから全人類一人ひとりが原爆や戦争について考え直さなくてはならないと思います。そして原爆を持っている９か国は手放さなければならないとも思います。でなければ、この世界にこれからも無駄な被害が出るだけです。まず一人ひとりが原爆について考え直さなければいけません。そして被爆者援護会の土居さんが言っていたように、小さいことから争いを無くし、相手を思いやっていくことで、少しずつでも平和に近づいていくと思います。

僕は今回の研修で、普通ではできない体験や話を聞くことができました。そこで学んだことを自分の内でとどめるのではなく、多くの人に伝え、少しでも原爆が早く地球上から無くなるようにしたいと思いました。

原爆のおそろしさ

小坂井　杏莉

夏休みに、私は平和推進事業で広島の平和記念公園や平和記念資料館に行きました。教科書だけでは学べないことを学び、平和について深く考えたいと思ってその地へ足を運ぶことができました。原爆や戦争についての知識は、教科書やニュースで多少は持っていたつもりでした。しかし静かな公園の中に、当時の姿のままで残っている原爆ドームを見た瞬間、昔この場所で起きた恐ろしい出来事が一気に感じられて、私はしばらく言葉を失ってしまいました。資料館の中はたくさんの見学者がいましたが何とも言えない静けさでした。展示されている数々の遺品の中で、特に私の心に残ったのは、一つのお弁当箱です。当時 13 歳だった男の子が動員された作業場で被爆したそうです。真っ黒に焼け焦げ、熱で変形したお弁当箱をじっと見ていると一瞬にして未来を奪われた男の子の無念さや、残された家族の深い悲しみが伝わってくるようでした。子供たちの何気ない日常がたった一発の原爆という兵器によって一瞬で奪われてしまったという恐ろしい事実に、また言葉を失い、胸がしめつけられるように苦しくなりました。それと同時に私は、今の自分の生活について深く考えることができました。毎日学校に通い勉強し、友達と会って、家に帰れば温かいご飯を家族と食べる。この当たり前の日常がどれだけ恵まれていることなのかを思い知らされました。この日常が今もなお、どこかでできない人がいるので感謝を忘れずに生きていきたいと強く感じました。

広島を訪れて、戦争の恐ろしさと平和のありがたみを肌で感じることができました。語り部さんの話が聞けたことも教科書では学べないことでした。今の私にできることは、広島で見たこと聞いたこと感じた胸の痛みを決して忘れないことです。そして身近な人を大切にし、自分の周りから小さな争いを無くしていくことだと思います。広島の悲劇を過去の歴史として記憶するのではなく私たちもこれからの未来へと語り継ぎ、絶対に戦争を繰り返さない平和な世界を築いていきたいと思いました。

原爆の被害

奈須　晴大

僕は広島派遣で印象に残ったことが３つあります。

一つ目は実際に広島に行ってみて、思っていたより栄えていて都会であることが印象に残っています。

二つ目は被爆者援護会の方たちからのお話です。広島での原子爆弾の投下から 81 年という年月が経っており、原爆の話を聞けるのは今の時間しかないのだなと思いました。内容はとても悲惨なものでした。原爆の光を見てしまった、それだけで視力を失ってしまったり、放射線や爆風が人々の幸せを一瞬で奪ってしまったり、原爆はとても怖いし、もう二度と同じ目にあわせたくないと思ってしまうような、とても悲惨なお話でした。

三つ目は広島の式典です。この式典では小学生が平和の誓いを堂々と話していて、とてもすごいと思いました。

僕の広島派遣のテーマは被害です。僕が広島派遣に応募した理由は、広島の人がどのような被害を受けていたのかについて、興味を持ったからです。広島に実際に行って、本当の原爆の怖さを知りました。原爆資料館にはとても悲惨な写真や、実際に被爆した服などがありました。本当に見ていて気分が悪くなってしまいそうなものばかりでした。

このような経験ができるのは、飛島村の方々のおかげで成り立っていると思います。僕はこの事業に参加できて本当によかったです。ありがとうございました。

原爆投下に関する資料編

原爆投下前後の動き

１９４５年

７月１６日	－	人類史上最初の核爆発実験実施(アメリカ･ニューメキシコ州アラモゴード)
１６日	－	アメリカ重巡洋艦インディアナポリス号､マリアナ諸島テニアン島へ向けてサンフランシスコ出航（ハワイ経由）積み荷は広島へ投下予定の原子爆弾のための核分裂物質ウラン 235 と爆弾の一部分（その他、ウラン 235 や爆弾の部品なども幾つかに分けて空輸）
２５日	－	原爆投下命令（アメリカ陸軍参謀本部からグアム島の戦略航空隊司令官あて）
２６日	－	米英中三カ国名で、日本の無条件降伏を求める「ポツダム宣言」を発表
２８日	－	日本政府は、ポツダム宣言を「黙殺する」と発表
８月　２日	－	アメリカ陸軍第２０航空軍野戦命令１３号（８月６日　日本攻撃、第１目標広島市街地工業地域）
８月　５日	21:20	警戒警報発令
	21:27	空襲警報発令
	23:55	空襲警報解除
６日	0:25	空襲警報発令
	0:37	爆撃目的都市の天候を確認するため、テニアン島から偵察機３機が広島、小倉、長崎各都市へ向けて出発（日本時間）
	1:45	B29 爆撃機「エノラ・ゲイ」号、原子爆弾を搭載してテニアン島を出発（日本時間）この爆撃機には、爆撃の破壊力の測定機材を投下する１機と写真撮影のための１機が同伴
	2:10	空襲警報解除
	2:15	警戒警報解除
	7:09	警戒警報発令（1 機の B29（原爆投下のための天候観測機）が広島市上空に侵入）
	7:31	警戒警報解除
	8:15	警報が市民に知らされる前に、原爆が投下され、さく裂
９日	11:02	長崎に原子爆弾を投下
１０日	－	日本政府が「新型爆弾は国際法違反」と抗議声明
１４日	－	日本政府、ポツダム宣言を受諾し、連合国に無条件降伏
１５日	－	日本政府、国民に戦争終結の詔書放送

投下目標にされた都市

１９４５年のアメリカ側の動き

４月　－　原爆投下を研究する地域を次のとおり選定
東京湾、川崎、横浜、名古屋、大阪、神戸、京都、広島、呉、八幡、小倉、下関、山口、熊本、福岡、長崎、佐世保

５月　－　投下目標を京都、広島、新潟にしぼる

６月　－　投下目標から京都を除き、小倉、広島、新潟に目標を設定

７月２５日　広島、小倉、新潟、長崎に決定

３１日　広島を最優先目標に設定

８月　１日　目標から新潟を除外

２日　攻撃日を６日、投下目標を広島、小倉、長崎とする最終命令

６日　広島に原爆投下

９日　長崎に原爆投下

広島に投下された理由

戦争末期、日本の主要都市はアメリカ軍の空襲でほとんど壊滅状態でした。そのなかで、原爆投下目標として広島が選ばれたのは、次のような理由からと推測されます。

① 都市の大きさや地形が、原爆の破壊能力を実験するのに適当であり、同時に原爆投下後の破壊効果を確認しやすかったこと。

② 軍隊、軍事施設、軍需工場などが集中し、しかも無傷であったこと。

原爆投下までの経路

広島へ原爆を落とすために、テニアン島から B29 爆撃機「エノラ・ゲイ」号が飛び立ちました。テニアン島から広島までは、約２，７４０ｋｍで片道６時間３０分の飛行でした。

原爆による被害

広島市に投下された原子爆弾は、熱線、爆風、放射線により、一瞬で都市を壊滅させました。当時、広島市の人口約３５万人のうち、１９４５年末までに約１４万人が死亡しました。

原爆は、爆心地である島病院の上空６００ｍで爆発し、爆心地から半径２ｋｍまでの地域では、建物のほとんどが全壊、全焼しました。また、大量に放出された放射線により、発熱、吐き気、脱毛、出血などの急性障害を発症し、被爆から年月を経て、白血病やがんによって亡くなる人が増えていきました。これらの症状は原爆症といわれ、現在も原爆症で苦しんでいる人が大勢います。

――編　集　後　記――

本事業は、飛島村の将来を担う「人材育成」のため、生涯学習の一環として、学校以外の教育の場でこれからの生き方を考え、平和の願いを後世に伝えていく事が大きなねらいとなっています。

現地広島において、幼少期に実際に被爆された方など、お二人の貴重なお話を伺った後、平和記念資料館の見学や平和記念式典へ参加し、派遣された中学生にとって非常に意義ある研修となったと思います。

その内容については、それぞれの生徒が見て・聞いて・感じて・考えたことを本書に綴っています。

この事業が生かされ、今後、より平和な世界になるよう願い、結びとさせていただきます。

発行日：令和８年 10 月

令和８年度 平和推進事業報告書

●発行／飛島村教育委員会
●発行部数／180 部